都林泉名勝圖會　二

都林泉名勝圖會巻之貳

目録



粟田院
圓山
端寮花洛庵清阿弥
勝興庵正阿弥
皇太后妍子塚
高臺寺 開山堂 小方丈
祇園社
祇園御輿洗邌物
叢阿弥 長嘯梅

青蓮院
多蔵庵春阿弥
多福庵也阿弥
将軍塚
長樂寺
双林寺長喜庵 方丈 遠州叔夜 菊溪
霊山叔阿弥
下河原女伶會

大谷寺
延寿庵蓮阿弥
長寿庵左阿弥 織田道八墓
上東門院塔
蔡華園院
傘亭
文阿弥
珠阿弥
正法寺





赤山社

乎乙女の袖ふり宮れ境ゟ
言水

赤山神祠

赤山神祠 修学院邑の西の方にあり いにしへ僧の安恵慈覚大師の顧命に依てこゝに社を建る 元亨釈書 社頭の林泉玲瓏として特に幽邃なり 官家より修補ありて神殿壮麗とする
比叡山に伽藍を建立し王城の鬼門金神の守護としたまへ由縁也
世に将宅の附当社の神札を受て家に張る人ひろし 唐土の天台山に擬して

慈照寺銀閣は足利義政公の別荘也 浄土寺村にあり 東求堂の中央は相阿弥の筆の苑なる之殺寿屋四畳半 其中の違棚の張附梅の画は古法眼の筆 帳台の腰障子琴碁書画の図は狩野永納が筆 蘭水仙は相阿弥の筆之 東向は義政公薙髪の木像を安ず 延徳二年正月七日に薨じたまふ 慈照院殿准三宮喜山大居士と称す 台齢五十六 此間の竹に若松は相阿弥図し 方丈の中の間は海に友君の仙人尽し 東の間は逍遥軒の山水 之西の間も山水なり しかく狩野隆也の筆 襖は土佐光興 屏風は相阿弥の筆 芦と薄に金銀の砂子を灑ちらしたる希代の名筆也

集芳軒 堂後にあり 近世の造立也 維明和尚の梅其月溪の画なり 茶水井 東求堂の北にあり 沸泉の流れ 東求堂へ通す

○足利将軍義政公は永享八年正月二日に誕し宝徳元年四月廿九日征夷大将軍に任じ亨徳二年三月に従一位に叙し同年十二月源氏長者として淳和奨学両院別当に補す 応仁元年山名宗全威を募ひ管領細川勝元も合戦止事なし 此時勝元は 主上上皇を迎まゐらせ三種神器を携へて室町花御所に籠り 将軍家は勝元を捨て宗全に寄せて 天子を挟て日々闘戦を以騒擾に南禅寺相国寺及寺院多く焦土となる 真に外洛中洛外諸庶等民家等兵火に罹ることのこまかしきまで応仁乱といふ 此附本朝旧記諸家文書兵燹に焼亡紛失せる事数知らず 同六年十一年大明国の勘合を求む 応仁元年より十一年まで諸大名みな其領国に帰て割拠の形勢あり 尚山名細川の徒洛中に対陣せし 将軍を足利義尚公に譲て東山慈照寺に銀閣を建て古器名画を翫び芳茗を喫して幽棲し世に東山殿といふ 延徳二年正月七日前征夷大将軍従一位准三宮源義政公薨ず 年齢五十一 太政大臣を贈らる


銀閣寺
林泉
相阿弥作
銀閣の林泉ハ
向ふ庭造傳或ハ
都名所ふ出されも
年歴累ふ多く
樹木古朽し又
新ふ植かへしも
数ふ寺僧の
好ふ任せ多く
今時の
体を図さ
月待山
潮音閣
向月臺



東山相君茶泉碑

東山相公嘗好茶事東求堂後園五十歩許有泉今猶存焉乃其所嘗汲云極清潔大旱不涸也呉田北渚吉敬仰止遺蹤屢来寓寺朝夕挹注以充雋永之賞因立碑其側表焉使余紀之銘曰
甎深匪廣　俟盈俟沖　雲芽之賞　千歳是同

寛政八歳丙辰春　前相國寺蕉中顯常撰并書

慈著侍者

やよおこかし東の山れ禁寺をてす川風の聲とちるくすそのく名よろる寺
吉田敦

ちはつもおれいまもさへるん古寺み都の志のひれ袮こそかれるや
おもしろく

吉孔東翁設茶讌於銀閣集芳軒一日與諸客應其招席上賦贈
六如慈周

開爐邀韵客勝践興逾嘉厨辨遊巡酒筵寛自在茶池臺猶覇跡宗祏付僧家讌罷還思古霜林錦繡斜

東山慈照寺にまうてゝ茶の席に盃のめくる日中かくして
慈延

このあれふりし世のとし杖の色をおりえてをらふの色ふとしけり

茶とのへをそなかさ
金子義篤

世の塵とワれもけまれくのおまとそむつちや涼き山れ下庵



時余執務在萬年山因及此

松寺此歸日已深山色秋閣中紅葉映池上白雲浮
意淡圖三幅情濃茗一甌幽期曽不負清靜與君遊

慈照寺新州

吉田孔夷見邀于銀閣精舍
待以茶式小詩以謝

紅楓緑樹夕陽明銀閣風光画不成
更有相公留勝迹好逢幽士弄餘情

台洲元凱

呉田吉處士設茶讌于東山銀閣見招

畑維龍

覇圖閣古倚崔嵬沼苑竹闌人迹稀丈室馨香薰
帳壁間画影映山扉石爐茗瀹紅烟動楓樹雨點白
日微朝埜何妨同臭味到今風月仰光輝

遊慈照精舍謝北渚雅士饗茶

雪樵道祐

台麓之西鴨水東傑然銀閣出琳宮珊珊洗月泉千
尺梟梟拂雲竹一叢巌催虎頭蹲草裏橋斜龍背臥
池中愛君來此能延客茶味殊非世味同

蕉中竺常

過慈照寺尋道可居士不遇

孤節紅葉径寂寞鎖山房猶餘石鼎火
使我玩遺芳

吉氏家

濯錦橋

みそされハ崇けをとちそふた落てふしたを濯ふ橋ル下水

まんとうなんかうさにきてすめるなる
寄松茶恋といふことを
森中に見せ侍くおめしふもみちまかのむろやつくさにたちまさるらん　おもしろし〳〵
今やけ力自のうちとうりやまちけ秋まことふや多
その勝りくる時よとて謝ひぬる　ある名
木の葉ちる秋すけおもくしに雅ありして秋まくけもちかくくもちふ　おもしろく
館林
むさひてしやふるのいと妹をいれさ文字に表れをかうし我念とも　おもしろく
覚免
くらぬるも又もかけひのよことみて同しこころけ人やくまなな　おもしろし〳〵

東山相君泉呉田老居士新建碣使余銘之尋有點茶見邀之約乞賦贈之

道是相公遺愛傳　勞君此日認山泉
佳期更在清秋後　一斛松風邀老禪　八十二翁笠常

萬歲千秋好此傳　林間建碣相君泉
水脈終無盡　洗却塵勞打坐禪

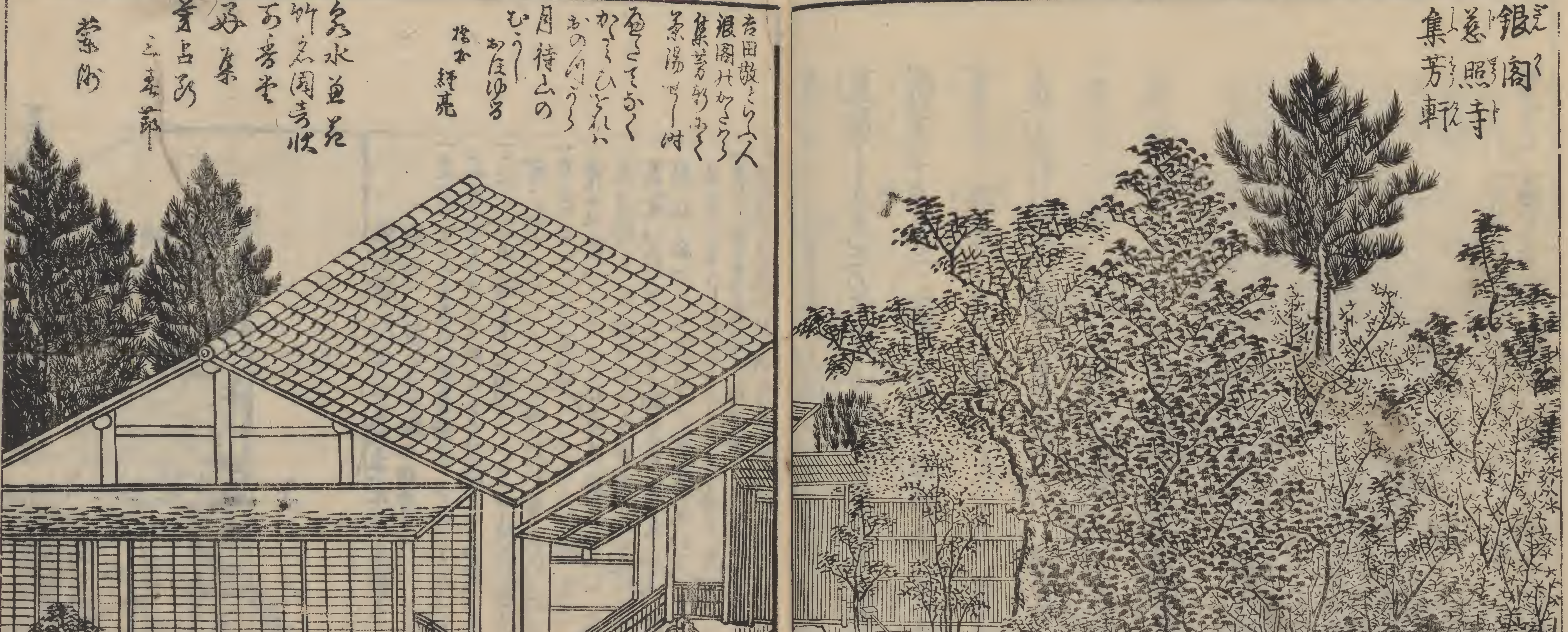
次蕉中尊者見贈吉道可居士韻以謝居士造碑
東山新洲周鼎和尚拜

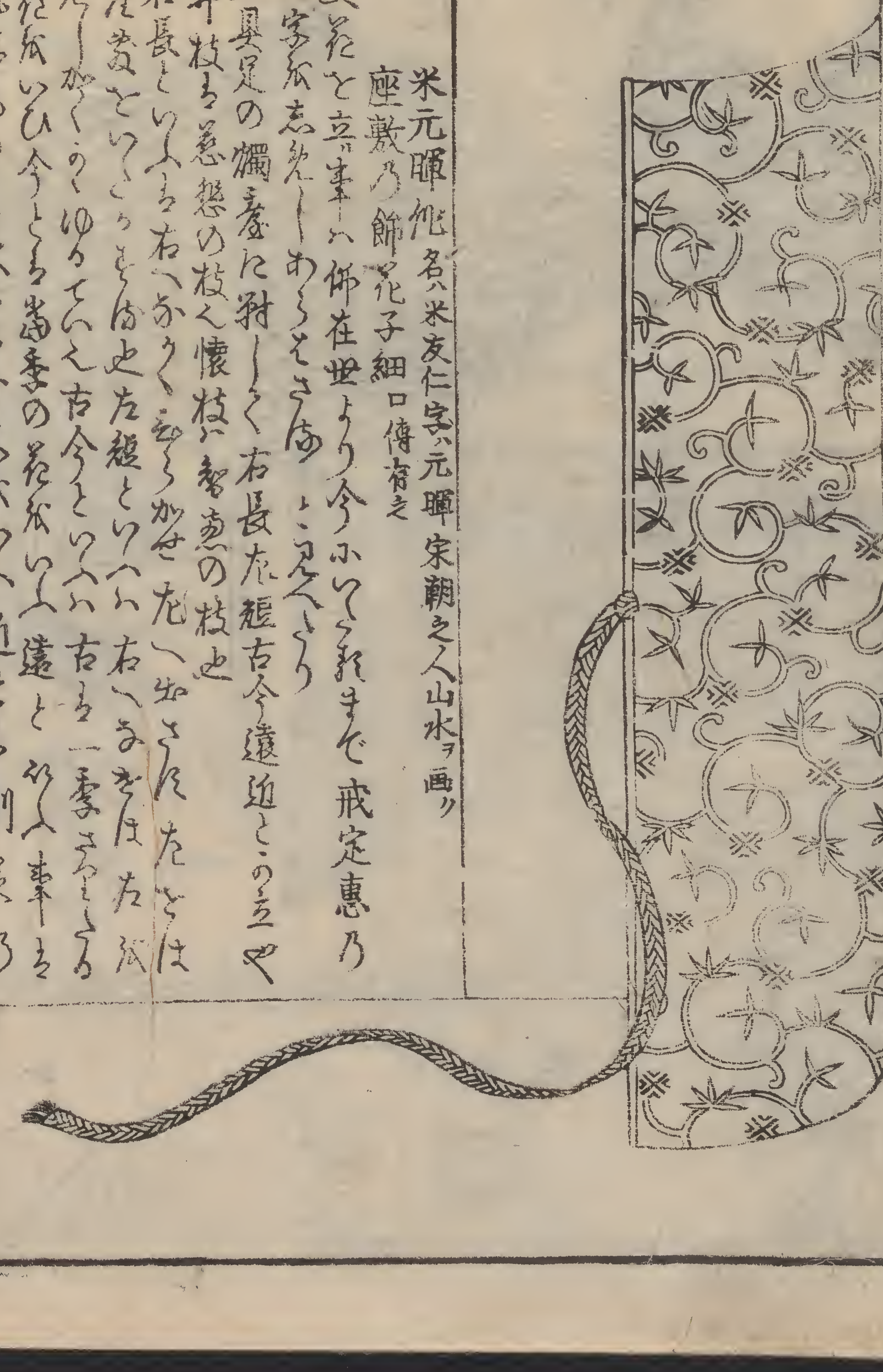
原當山は將軍家の山閣なれど莊園なくして封境廣し應仁の乱に荒蕪し又天正の末近衛龍山公豊臣秀吉公と御中不和にして龍山公は筑紫へおもむき二三年を歴て帰洛しあそ後当寺に姑幽棲し給ふ其時什寶多く離散したるを拾ひあつめし今僅に寺寶とある其品目に云

○東山殿月見御會十首和歌　左に見ゆ　○硯箱　銘布留野蒔繪和州布留明神社圖　東山義政公の所持
○東求堂額　東山殿 真筆　○同仁齋額　同筆　○七賢盃　七盞 有銘 七賢畫 悉竹林
○東山殿家集　板書　○唐物朱塗蒔繪膳椀　五十人前 希世の名器也 今十人前あり 是又天正に離散して

東山殿月見御會十首和歌

月前煙　君の名こひろふにきゆる野しの秋れ字つりてうらそ月にたえきぬ　義政公
月前鳥　めくりあへ雲ゐをちかうふきさえてゆうしらやこれ月乃こゝろもかはらの○
月前虫　霧ふかき茶の花のなとりさとくさや宇治月にむしそ鳴なる　道永
月前鹿　月みてそいやく秋ちきぬ老か身の秋きの友とや鹿もなく覧　大納言典侍
月前鶉　身にしむる世の世の霧に月深きうやうのそこ乃秋風
月前鴨　とのいから秋れへそのうは秋に多て月に秋かく寺さのちぐ○あれ
月前雞　おやことに月うこぬうしは神うたの杖へ法あとうや初うち寺るらん　季經
月前猿　月見はくおくさ多く秋なつひしら木にうらやうたてあともうかよる覧　元長
月前鐘　みろおつひぬ月をむ秋そのかね○の一夜うけゆく秋の空にたつる達て　興宗寺宮
蕭寺月　月そうなな秋の木にすふ影見へてめくる横河のみね○乃よこ雲　光隆


銀閣 慈照寺 集芳軒
吉田敬とらへ人
銀閣にかざりて
集芳軒ふて
茶湯せし時
月待山の
橘 経亮



義政公御成式目壱巻

相阿弥筆
表具茶地錦

米元暉作 名ハ米友仁 字ハ元暉 宋朝之人 山水ヲ画ク
座敷乃飾 花子細口傳有之

一まへ花と云事ハ御在世より今にいたるまで戒定恵乃三字を志めしあらそふなりといふへきなり
一三具足の燭臺に對しく右長左短古今遠近と云立也
昇枝ある慈悲の枝と懐枝ハ智恵の枝也
一右長といふる右ハおかく ひろかせ左ハ出さる左とは
花袋といふこころを傳也左短といへハ右ハあさき
見しかくうつゆていふ古今といふハ古ある一季さかゆる
花なりいひ今とある當季の花なりいふ遠と云事を
風情あるくみへさる本木なりいふ近とある副菜乃
水きハおもくあらりくとしるあるをいふ
一花の本木なし心といふ事ハ人も紀あるといふ心
定情ハ此與ハ其外花を本胴よく

一いつ御成の以前ハさる本木なさんといふハ此まて後なり
一公方様御成の時押板に三幅對三具足香爐匙火箸
の臺香合を卓の上に置也 具足ハ三ツかさり
並置たる様を中に香爐ありまする也
まへに香合右に燭臺左に花瓶此時の花ハ
の鶴に對する右長左短の花を挿也
瓶ハ繪の前にて卓の下其上に
左の繪の花の花ある右の脇花瓶に
右長左短とて立也又右の繪の花ある左の脇
花瓶の花なうけ左長右短とて立也脇花瓶の
花ハ心當季の花を挿也
一五幅一對をかけるある口傳大事ありて秘之
本尊の前の卓も五ツかさると云事有是鶴臺二
又花瓶二中にハ同前鶴ハ内にあり花瓶ハ外に
あり此内といふに二説あり口傳也鶴によく
かうをへかける
一脇繪定四季の繪あるへし掛らハ裏秋冬と春より
をしめくて掛るなり
一香爐の上にハ卓を並ぶる事也 卓も
一盆に花瓶をおくべし板ニハ花架の卓なおく
べし
一茶碗のいふ花瓶をちゃわんの臺にをく並うべし盆と卓
又鶴盤かとにをくべし
香爐のさいる五具も六ツにも分けおくべし足もは面
にむく順にお口傳あり
一方盆あハ右に香匙火箸臺中に香合左に香爐と

さく也
一右の鉢に花入ハ下にて置押板にそへ右の正此
尾によりく花に對しさくさく也又一物ありも
押板の中に置也
一違棚ハ間香爐を置が本也其外の物ハ志ゝの唐
画の花車小兒もてあそひさくさく置し食籠一酒の
入物一盃一茶碗の類ありは香袋の類一菓籠
箱一らし湯瓶一壷一如此物の類ハ名〻好により
て拵く色紙青黄赤白黒とて置之
一ちかひ棚の立花ハよくよくちかひのちかひにて立也
細口觚筒此風情なるハ中の棚にて拵く又双花瓶
木ハ下の重に立へき也
一柱掛瓶の花ハ下ハ花に同前さりなからおとなしき
心にたしなみのあるへし
一祝と祝言の花にハ深山木花を枯枝なとて禁也
菓花心の花にハ木の枝をそへ色々の深野乃草
なとしたる祝言にそへ置へし
一花瓶の花に花瓶のちそうより下へなる事なきなる
ものゝへからず禁忌なくハおなしくもいろく
一三具足の香合ハ口二寸なまりにかゝる也
一風動のかことけるところハ押板の角柱の四分半の面に
候て紙折へし繪の中名りのよき琴の糸也
一押板の高さハ敷居より八寸但一間半なれハ七寸又ハ之
もろさき尺八七寸く
一柱飾の釘たかさしはより五寸下也大客殿にかけ
書院又ハ小座敷の如く

一風鎮ハ座敷ハ櫞の通り本にかゝる也日本ニハ廣櫞乃
天井まもかけ又客殿の中央の卓の上にも掛也
又ハ押板の花瓶の花にもかけく
一火鉢しとは押板の花又半間押板の花瓶等
なるべく掛く
一喚鐘ハ書院の天井の中程にかけ置之
一茶の湯ハ　公方様の御成の前に御同朋のかようちうく
ふ仕立の本也御生花しくハ御引あく納を付る事
本なり
一花れに盃を置附る建盞を臺にも置く　さるへく
花瓶ハ右に茶筅左に壺中に茶酌を置也
一うかひ茶碗を臺にもくらく花れのそれ〳〵に立る事
あり又建盞を一盃に入さく　臺ともに一物にさく
事も作
一草の花に花瓶ありる事古今の寄に
　葉山の紫葉乃色〳〵ありれける
　　妻見しに松人しらぬ守ハ
さるの心をうる時ハ其花によく色勢く中に
よくしらせて拵へ
一花の枝をきる次第に忌事おほくしめたることし
の枝とく同じ紙にあり枝をのむつきく是を
人のきる物に似ていはくしもさるこ
枝とく西へ立枝見て立人とのを置忌也
菓も正面へハなひかせぬ事又同菓を麦方
へ同し次りになる事もいはく又十文
字の枝とく忌へしされハ本木のものによく

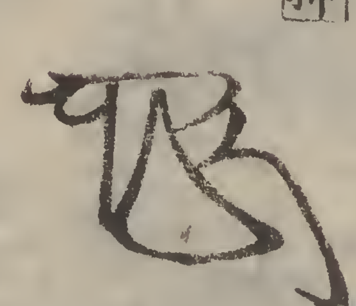
枝のさしくる附其よりつかに左へ葉をさしたる花に
させて十文字に見ゆる事わろし／＼
一かさりの枝と云ハ本木の枝に左へ出る季なる枝の背附其下
葉たれ出る葉末をたつるを云とも成て忌也
一右長左短の花ならハ右への副葉成かけさせハ左への
そへ葉彦麦をつくる心思ほ面白し
一左長右短の花ならハ左へ出て右へ出る葉閑なる事て右へそへ
葉ハなく出るし 然ハ心のうし添へそへ葉立なる所
おもしろく／＼
一花瓶の口ちかくより出る葉花瓶のかさようのひ
てちかく面白し又花瓶の口をさく ある附へくち
のきハなく ちかく へく／＼
一本木の名季なる事あらハなくしく立さする心をよく
させて立置たる名季足しる木をも立置たるう
かけたる花ハ名季置うた襯木を二本立てさく
葉を仕るなり
一祝言の花にうちきる松とて松そうり立る事有
これハ善本なる各なる小枝の五方へさしたる松に
うし擶さを西へかしらく立置たるなり
一当座枝と申ハかし色に後へしたる松いむへき之
一双花瓶に心一つけ出しくさ若くみゆるほとたる
騎蘭ハさくた木の物を心の外に高く此の立也
一仏心ハそこし花へうつらく仏なれたるなり
一二心といへハ花瓶のどうぬらくしく菊かれ清き
仙翁茅などの盛うなる物一本つ立し後まよふく
し待二本なくへし立しくもれとりくあり花瓶本へ
あるへからす
一かき入花と云事ハ舟花の事也
一花をいりくと云事ハさしいろうの中うなる物を花かた
いけいといふ 聖心にある肝に入るなり
一双花瓶に木を心なる事に木を心ゆかなるに
先っ心をたて其後で縫成らに拵へ葉あるへし
一双花瓶に葉花を立る事ハ澤に葉の生するとみる
ところに立へし
一花瓶ハ本尊の面の向方へ清く形ハ入あく
て立也
一副葉ハ本木の中に添き時其の中心かくをやうに
さへきさ之その副葉の中にわろくそれに
副葉とて副也
一葉も木も若くある物ハ若く高くある物ハ多くわ
心なりく立へき也 是を口傳おほく仏はこのさ
形らぬへし
一よめとむこ入に花を立る事是ハ花を
抄る時よりくく久しく男を女の心に立は
本也
一毎事祝言にハ松を立る本也物の色成四色す
一位ら所事花四瓶立るは事也
一心に風の枝ある附を副葉にも風の方へ添ある
置し 掛絵に風ありハ其風にかうにふうをへ絵の
事不然し書院又ハ窓などのあつきよう風
の入る所に立る也
一当季の花を捨て別の心を立る事 ね

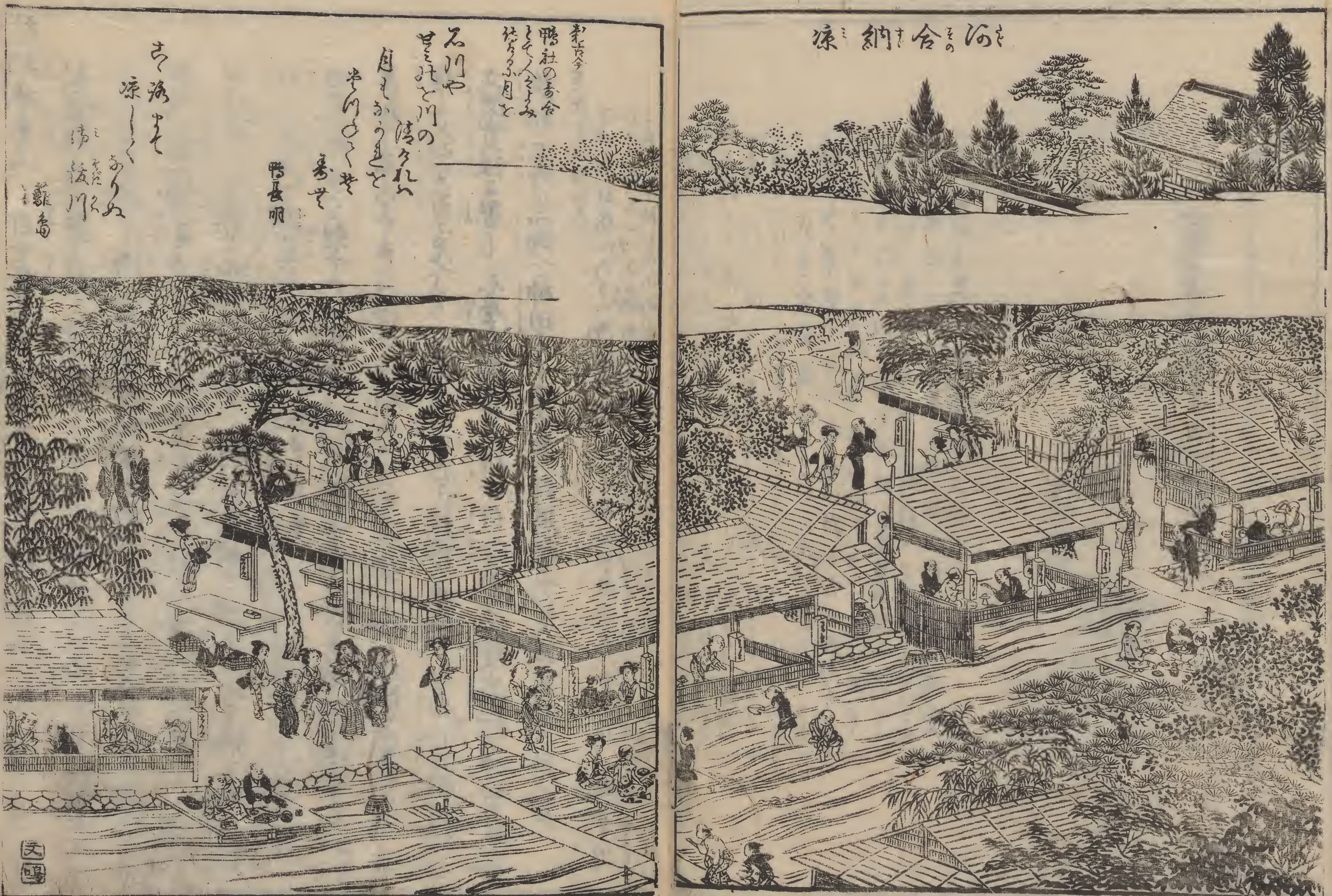
なる事なくし只其時の季れ花を手に任せて
さしはさみ入れなくさしはさみなる本ならべ多くへバ申
楽の志そふ笛を吹き謡ふうたひはしきそふもやし
さそく其志そふおもしろくみをり座りにて立つ
体也
一花はらた時ハ多く草まじく活らく花盛さしくは
乱草まじくやさしく立つべき之
一花さは物多くに寸のをかなへ多く草そへよく
しん奇の上の句に当れ声なり歩は君
きえぬと云座りに本木を寸りして下の句に
山さかいかて甚ふしく活しとはく花に多く
草ふそふる之
一活らた本木ある時ハ古奇に
ものゝ婦諸やあきは活くらへとての上に
あられ無むし侍る次の志のそら
やいまへぬに川座たり本まりたく花瓶ふ
よく見なく此花瓶ふハいり座りにて立せらんやを
あんしらくしたゝみを活して立まり志の
いきれを継く見なく初心を忘き次あくらし貴
まく流ふをく寸人の面れなく十瓶あらハ十瓶
百瓶あらん百瓶ふりりて志のとあるまゝ所に
目北あります座た所に鼻のあり阿る座き所
事口の阿事せすみしく活そうふおもしろく志自
く発あゆる阿るまひ発見えくおもしろくる
物の下にまるちしめく阿るをそとおもし活く
思白ふ事とけく目のある所事にふ活けそれ

のある所に目と付はせてろ事よ川く見かさるく見
えしく見えハとさう花活てくさく見ろふ初心ま
うけく花瓶毎に活しくみて立まり花乃
えさくはる活うに草の枝さるさ活うにとかくとも
ありしくはしくく立事あらくるにありハ活し九に
ちん仏千金莫傳地の上まハ直く君の上にある
曲まり慈悲のえさく智恵の枝で前口傳あり心
を身と云ふを川字本枝あるへし左乃枝まり
智恵の枝前付ら右の穿枝ハ慈悲の枝あるへし
又右の枝に智恵あるは付ハ左の枝事慈悲あるへき
ありぬ枝るこの為慈又かくゆる枝垂この為智
是枝れこの為心得也完堅く

此奥中華画家姓名有百餘人畧之

相阿弥花押





河合納涼
新古今
鴨社の哥合とて人々よみ侍りける月を
石川やせみのを川の清けれハ月もなかれをたつねてそすむ
鴨長明
[illegible]まて涼しくなりぬ御手洗川
[illegible]

糺納涼ハ六月十九日より晦日に至るまで下鴨社頭御手洗川のほとり神の
杜の木陰に茶店を設て遊宴しもて暑を避る也又井於社の清泉に
瓜や心太を冷し御手洗團子ハ竹串に刺て賣る上賀茂にハ申楽ありて
林間に笛鼓の音をつらへて涼し夏の火と秋の金ハ火尅金なりて相生
せざる故に厄氣を和儺の神事これを夏越の祓といふ下鴨ハ御祖神
社上賀茂を別雷神社といふ 延喜式云名神大月次相嘗新嘗 延暦四年十一月詔有て
愛宕郡にして封十戸を充らる 續日本紀 又弘仁十年二月にハ中祀に准ぜらる 日本後紀
承和十一年の冬にハ社邊の河水に汚を事を禁し或ハ社域の四至を定る事
倶に太政官符に見へたり仁寿二年七月にハ祈雨の奉幣ある事日耳衡をゆるの
文徳實録に署し天慶五年四月にハ臨時祭あり又愛宕郡の中賀茂小野
錦部大野の四郷を神田とし事ハ野府記及び太政官符に出たり

貝原京城勝覧曰
下鴨乃社南にあるハ御祖の社なり又河合の社と云 加も川 高野川
此下にて一ツに落あふ故に河合と名づく河合が森とも
よりなき社ハ山にありて東向へてまつるハ東西に二をだちあり

神社の東南にみたらし川あり清泉なり是より出る夏も甚冷かなり
糺の杜あり此社頭を佳境と云其日枝山の葉も赤きよし世人こゝに遊ぶ
四月中の午日神事其日御蔭山の茶村の御蔭山に
行ふ葵楽あり伶人も多く催し其日御蔭祭あり御蔭山にて音楽
と奏次第中たくも音楽あり其日御蔭祭あり此日御祭の儀あり
の座し御前二日を合ぎて下鴨の神ちりめく中の酉日まず此日下鴨の御社
勅使なし御前官司も多く従ふ伶人多くきたる
葵勅使立給ひ官司奏東舞楽をありて大楽奏しあり
神前にて奏楽あり又音楽賤ありまり見る事にて勅使これ後
葵楽といふ貴賤あり上賀茂ハ行ふにして官司伶人も赤
其日ハ勅使下賜より上賀茂へ行かる
従者なり ○上賀茂神社 当國の一宮なり平安城の
いふこと立させたまふより前し御社より大社にして其地を
後に山ある川ありて陽にむかひ陰にそむくなり歳を経て川の
の奥平安城の上流にありて山の形ちうるはしく
かくれいさゝかよく御社の前に向ひ二ふかなう城に神秀の
氣のあつまる處をもそれなる靈地なり王城の鎮守の
なりしも事むべなるかな皇朝にて王城の靈異ハ名どの國
ゆえ給ひしみや詳に志侍せり王城の東北方人ハ國に
此御神の事と之をさば先ッ此下上の御社に參詣し
あらく樫鍬をなさば諸來る人ハ心射ハさだよく齋戒して
かうやうの大社に詣する人ハみづから神祠に入て拜でまうべからず
絵を見し志うらバハみぶかた神祠に入て拜でまうべからず
と詳樫鍵せんとするはたゞそれうやまひて神慮にかなふまじきか
はく着うらバ
○境内に御手洗川あり神山より流れ出て本社の御前を

またやがくを下流となるの小川と云ふるの社は西よ流る古哥ふよめる名所なりるの社る御小河の東にありた岩本橋本の社あり斤罡の森る本社の東南にあり社の西に市原繋馬貴船にいり乃宵 ○四月中の酉日の葵祭に勅使先ッ下鴨の社に詣ひて後に御社にまうのほる官司及び給人も多く来り禮式あり蘭樂舞曲秘奏を勅使は下社來の行粧うるハしき事類なし下鴨まくも同じ石清水の祭を南祭として北祭といふ是古今天下の大祭也 賀茂下上の今日は祭が及び石清水の放生會の勅使にち古と皆く中にも久しく絶ふりしが近年まうたるをかこしく行せ給ふいみう人も数須都にあつまりて加茂のみつかへ奉ふる祭まうかくいつまでもふるめうしく賑はしき事なりたるるたもいふしへの事志るべし ○上賀茂の小よ出生ふ垂迹以てまる神山の西にあり 賀茂明神初く出現しまふ所なり今日白殿に参籠し給ふ社人氏人まゐるを ○五月朔日に神馬の足そろへの試あり 五月五日に競馬あり諸人群集まる事夥しと云

丈木
行園やみたらし原は葵くをとふかきてた弦かさしん　平知峯

御集
賀茂山のふもとの芝は春風にみたらし川の氷をとくらし　後鳥羽院

山家
月のをゑみかや河東に霜さえて子るもかく川瀬ゆゆく之　西行法師

鴨祠春望

鴨祠ハ崇祠ス神武天皇ノ皇祖ヲ也故ニ有名

緑鴨江開鳳闕東　一林春色鬱葱葱
何年鎖歇旧斎院　終古依然御祖宮
大岳北懸下岩秀　清流南合二川通
興来有意県村酒　頼是杖頭銭赤空

龍公美

水くらし月長明を痩ざらしむ　如泉

夕立や雙六の蹇鴨乃川　求導

かそうゆく瀬の小川や旅衣　文素

惺窩先生幽居蹟 市原村の西にあり姓ハ藤原名ハ粛字ハ斂夫北肉山人と称し黄門定家卿十二世の孫元和五年卒 次下に注記家を称れ又貫子林學士の祠堂二ノ瀬村にあり

氷室古跡 四箇所にあり 一ハ氷室村 一ハ栗栖野 一ハ高野村 一ハ松ヶ崎 延喜式云小野 栗栖野 市原 氷室村 云云

中山忠親公別荘蹟 直如堂の西にあり薩戒記に見ゆ又中山関白ノ第ハ百錬抄に出る又源頼政朝臣の古跡及ビ中山堂山槐記にみえり

卜部家齋場所 吉田山にあり原洛陽近衛室町の私第にありし事ハ日記に見ゆ文明十六年兼倶卿ここに遷し其法興名神扁額みな公卿の筆なる所也 天文十七年二月神璽をしく禁中に遷し尊く後陽成帝これハ兵乱を避んが為之兼右卿日録に見ゆ天正年中勅しく八神殿をまこに遷し慶長十四年八月勅しく神祇官代とある

吉田山遊宴

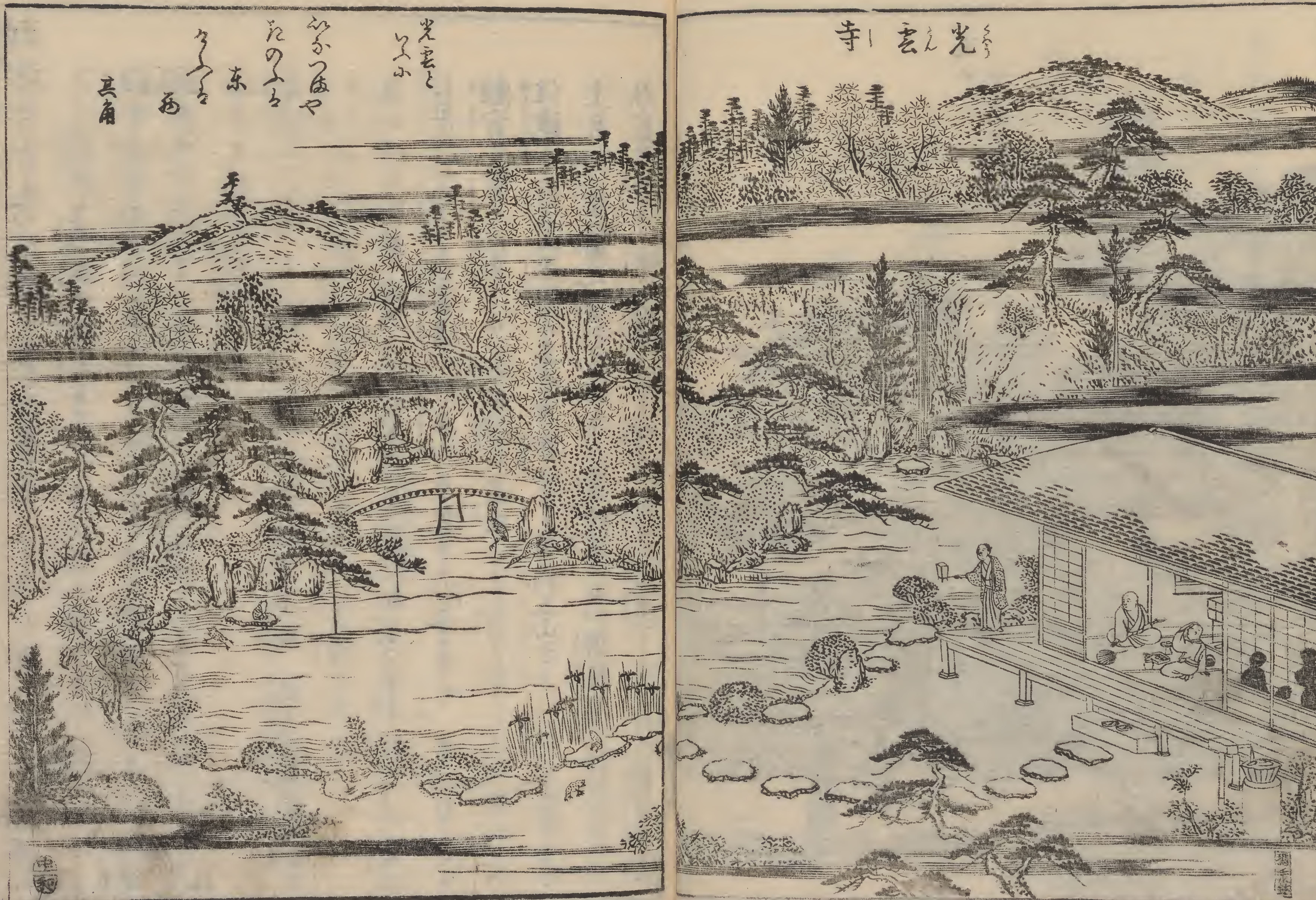


九月蕈香能引人
烟蘿巖徑起紅塵
松林自絶麏麚跡
剰見綺羅雲外新

皆川允

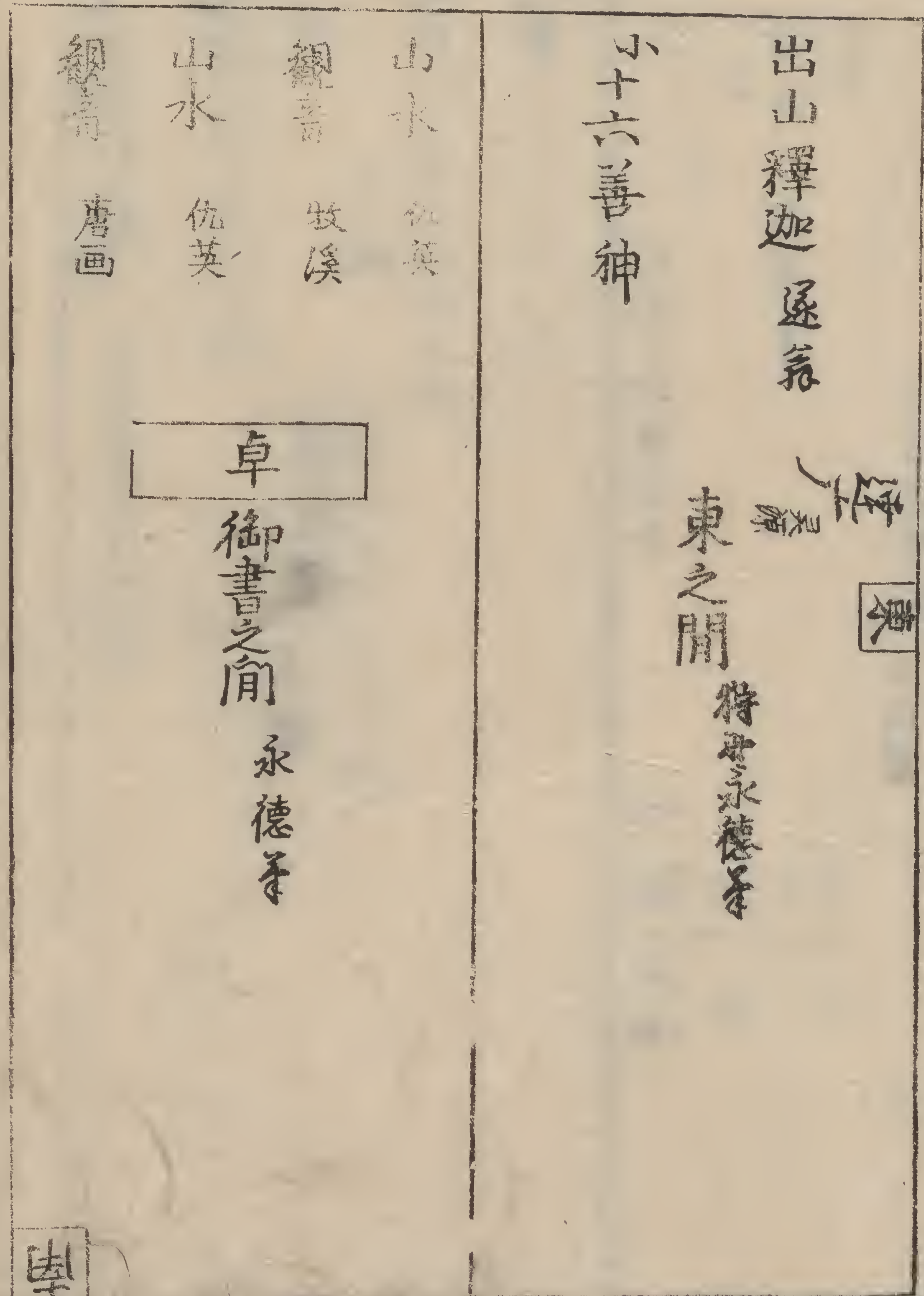



黒谷 西翁院
反古庵（ほうごあん）
藤村庸軒（ようけん）作
後世に
可まひさへん
草れ戸の
末の行せとは
その名にハ
しく
八幡
美濟


光雲寺(くわううんじ)
光雲と いふ
ひかつ夜や
花のくも
東
なつき 雨
其角

南禅寺方丈の林泉ハ奇石巨巌碪く雲夢七澤を開くの仙境也
方丈東間ハ鳴瀧の圖なる筆ハ古法眼元信の筆中間廿四孝ハ
狩野永徳西間同筆ふして花鳥の画之西表一之間古法眼筆
同其次の間次第二間共ニ竹ニ虎の画世ニ志ふ所水呑虎と以ふ
何れも狩野探幽の筆也
○南禅院ハ南の方ニあり　亀山法皇の離宮之中央　亀山法皇宸影 表 讃云
先切徳主亀山太上覺皇崩殂
嘉元三年九月十五日　此堂内三間倶ニ狩野常信の画あり
亀山法皇御廟ハ南の上方丈所ニあり当院の林泉ハ東南鮮ふして實ニ
日月を扶助するの霊境之称当山ハ寺記ニ云弘安年中　亀山上皇志て此
離宮を營く仙居しるふ厥后宮を喜捨して寺となし大明國師を
住職し給ふ又至徳三年七月勅して禅刹五山之上ニ称し建武元年
十一月より寺ハ圜太暦ニ見へたり　○金地院ハ五山僧録司と称し此院の
林泉佳境ふして名巌多く心といふ文字ニ双並ひして傍ニ鎮守昭堂
あり南方ニ　御宮あり此方丈ハ南面ふして中之間仙人盡左右ともニ
花鳥ふて狩野尚信の筆也其外当院玲瓏として此山の佳境なり

南禅寺方丈画干之体



大十六善神

琴

碁　孫通

書

畫　西之間　永徳

康富記　勧修寺浄廣卿筆

文殊
釋迦　思恭筆
普賢

七朝國師香陽最嶽和尚　鶴之間　古法眼

蘆葉達磨　南院國師　自画讃

十六羅漢

十六羅漢

眠鴎之画　萬國禎

後之間　於母主馬

百丈禪師頂相

臨濟禪師頂相

普明國師頂相

羅漢

夢窓國師像

宗家　画　思恭

寒山拾得

竹鶴

亀山法皇宸像

亀山法皇宸翰和歌

後醍醐天皇宸翰

鳴滝間　古法眼

竜渕室之額　後陽成院宸翰

應菴像 桃同寮 什物

此殿 後陽成院之清涼殿之

柳之間 古法眼

[illegible]

同同同同同同同同同同同同同同同同

竹 竹 竹 鴉之図

金鷄 鴨 鷺 林良

山水 舟行 水鳥 龍 花鳥 以上四松

蘆鴈 林良

蘆鴈 三友 岩上鴉 文進

荷鷺 司馬

文殊 宋之僧

荷鷺 司馬

鍛冶 達磨 探幽

蝦蟇

虎之間 探幽

山水 子畢

大明國師頂相

亀山法皇勅賛

虎之貳之間

後柏原院宸翰 探幽

山水 子果

龍 虎

亀山法皇宸 大明国師頂相 南禪国師頂相

探幽 探幽 探幽

探幽 探幽 探幽

示以俊墨蹟 梵仙

文殊 釋迦 兆殿司

普賢

虎之三之間 探幽

開山国師香陽亭一山

文殊 清拙賛

藥山圖 馬公顯

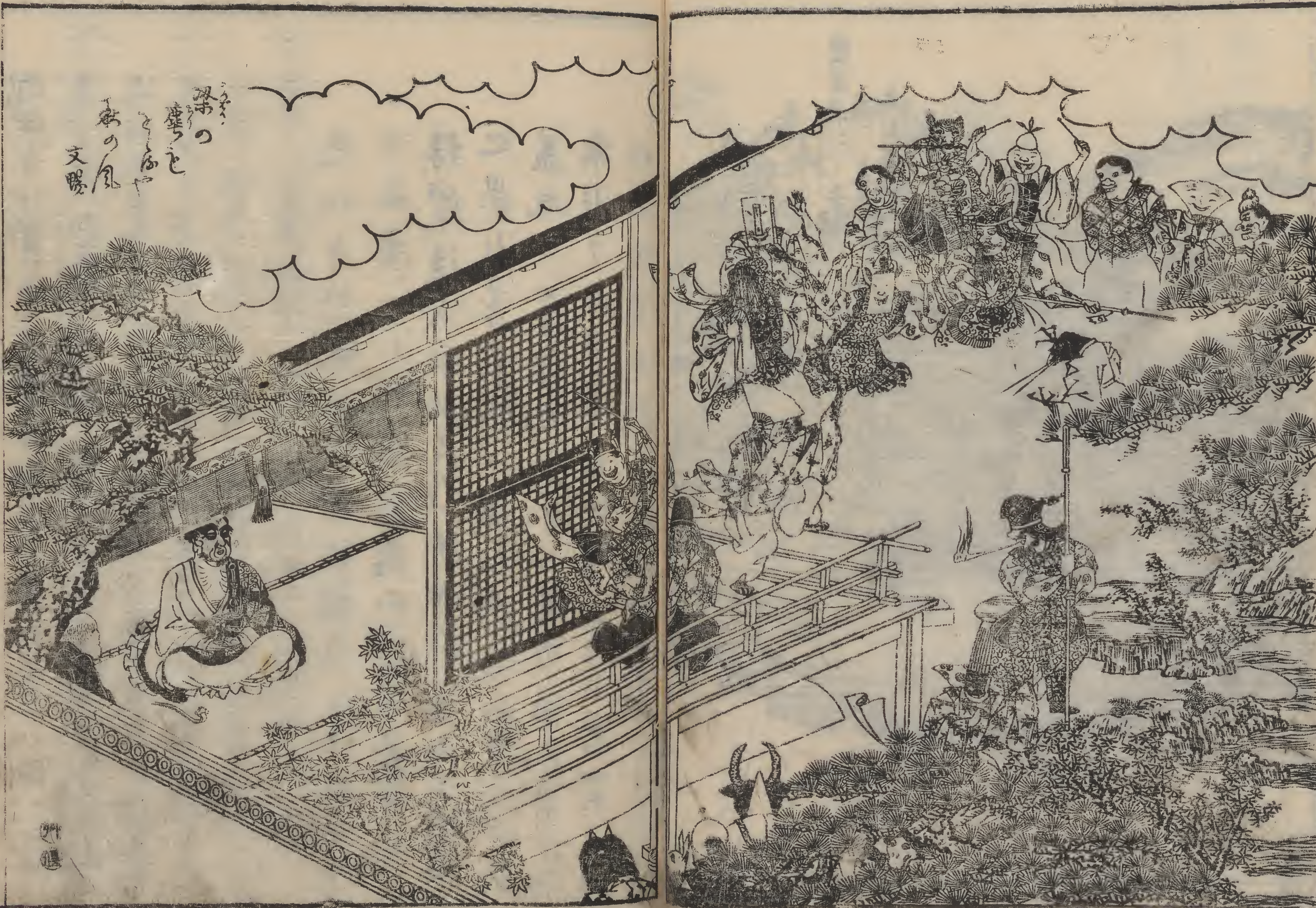
開山頂相 平田賛

藥山圖

南浦紹明（以下不明）


南禅寺
方丈


南禅院
亀山法皇古墟
亀山皇陵


梁の塵もとぶや秋の風
文暁

南禅寺什宝の中に菅神の徳銘 三幅 鳥樞沙摩明王 一幅 永仁七年亀山上皇の勅書正安以後綸旨国宣院宣建武中官符足利家古證文及び将軍家の施捨文等あり其外塔頭古書軸を蔵むる事数百通におよびぬれど筆するに際限なし○塔頭聴松院の林泉風趣幽雅にして庭に碼碯の水鉢あり又菅神夢想の名松あり老木の大樹にしてありしが近年裏枯して朽たり故に植継あり其銘曰

南禅寺聴松院者恵鑑禅師所住也曾伝一夜夢北野神君賜以殊所珍賞松一株覚後感銘無已乃早洒掃庭内卜地待之果自菅家贈一盆松与夢所見合云此蓋我曩祖也然不知其為誰向者予有故遊于此寺賞観有年矣青蒼鬱茂株根数圍実是数百年物也寛政辛亥今住持正巌禅師乞予詩之因賦一律応其需

青松百尺接天開　曾入高僧夢裏来
林下誰知奉神許　庭前偏好挺凡材
計年風外潮音起　仰徳雲間龍影回
况自奇句在人口　千秋併賞賦中梅

特進　菅原胤長

藤在衡公別業蹟 神楽岡の北にあり拾芥抄に見えたり藤山蔭卿の宅址もあるべし安和二年三月十三日尚歯会を設侍事著聞集に記し菅三品の序文は本朝文粋に載たり惟宗孝言乃詩に曰 勝地佳名何所感　栗田別業在城東 無題詩出

菩提樹院址 神楽岡の東にあり地名を櫻本といふ百練抄に云長暦元年六月二日上東門院菩提樹院を供養したまふ

玉葉 なにびとも櫻本をそゆうしたれ木のかげみに花や残てし　周防内侍

宝荘厳院址 聖護院村にあり長承元年十月鳥羽上皇勅して建立し給ふ拾芥抄に見ゆ承安三年三月十九日宝荘厳院にて和歌尚歯会あり藤原敦頼とゆへる上賞として藤原清輔とゆへる盟主たり百練抄に見えたり

南禪塔中
聽松院
林泉 相阿弥作
菅神
盃菱松




南禪塔中
歸雲院


南禪塔中
牧護庵


南禅
金地院
こんちゐん
小堀遠州作
真一
弁天
本光国師
開山堂



白河離宮 岡崎村にあり、法勝寺の地これなり。原ハ忠仁公の別業にて子孫に傳ふ。藤原師實公新たにまいらせしに、白河の帝に献じ給ひ、法勝寺と称し、累年中造營して離宮とし、承保三年正月二十五日、帝白河院に行幸ありしこと康平記に見えたり。又本朝文粋に云

夫白河院昔是大相國昭宣公之幽居今則博陸侯右丞相之別業也 云云

風雅
花ゆへにみゆきふりにし跡とめて名も白川の水 前大納言為親

新拾遺
宮こ人もめつらしとみる白河の花をそれともきかは御幸ハ 法性寺入道前太政大臣

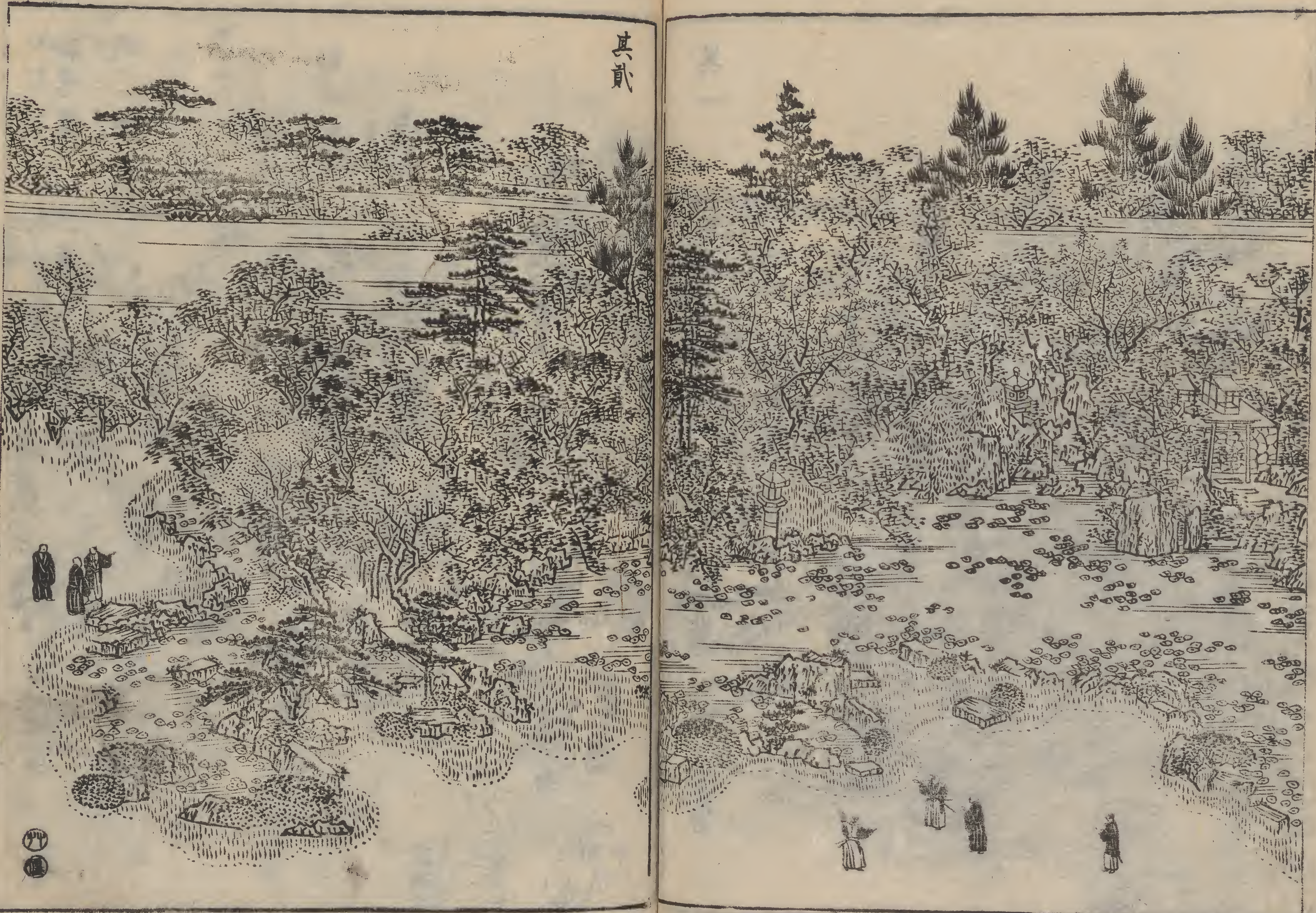
地名の字ハ白河の北殿・南殿・築山下ノ御所等あり。元永年中白河上皇の離宮なり。保元元年崇徳上皇こゝに遷幸ありて皇居としけり。関播(?)へ籠ありて、あらく決戦ありしに、上皇讃州に左遷し給ひ、是より原廟とて殿舎崩しぬ。四月勅して原廟とし、上皇讃州に左遷。是は粟田宮とす。又祭儀を嘉禎(?)の頃記にありとて建永元年七月兵燹にかゝり、二月重ねて建營あり。文和二年四月粟田宮は東の方に遷し、洪水の害ありとて、保延の比新殿を東にあり。泉殿ハ阿弥陀堂故墟にあり、地名今に当るを殿と云。治暦五年五月二日白河阿弥陀堂の泉殿に供養ありし事ハ後の北白河殿。押小路殿辺衛河原殿、傍に御所、白河池殿等あり。門院、北白河殿。野河の御所。白河池殿等ハ的所いまだ詳ならず。岡崎殿ハ岡崎村の中の地名にて、御所ありし所とて、嘉元年中上皇営のふるき離宮とし給ひ、又一年鮮に石徳におゐて見えたり


名物
南禅寺前
湯菽腐店

知恩教院
方丈
林泉

其一




其貳


知恩院
御忌詣
伴蒿蹊

陽成院陵 天暦三年九月太上天皇崩じ給ふ神楽岡の東に葬し奉る扶桑略記にみえたり今詳ならず

冷泉院陵 神楽岡のほとりにあり今鮮ならず寛弘八年十月櫻本の西に葬しまつる帝王編年集成にみえたり

後一條院陵 長元九年五月十九日神楽岡の東南に葬し奉る真如堂の菩提樹院を建給ふ扶桑略記に著せり

粟田院 粟田にの北字を圓覚寺といふ清和天皇の離宮なり三代實録ニ云元慶三年五月四日太上天皇清和院より粟田院に遷りし給ふ又云元慶五年二月十二日勅して曰ク愛宕郡粟田院ハ原是太政大臣藤原朝臣の山荘なり太上天皇清和寺とす勅して御經行のため禪をなしく仙蹕を駐られ遂に山地に移して終ふ道場とたまはる額を圓覚寺といふ又云元慶四年十二月太上天皇圓覚寺に崩じ給ふ又云延喜式云圓覚寺料一千束又山城志に源為義の山荘の址あり

無題詩云 今来圓覚勝形境 念佛遥期九品蓮　菅原在良

青蓮院 粟田にありむかし慈大僧正慈圓及び慈道法親王尊院に住職し給ふ和歌の續後撰集及び玉葉集に見えたり男山内に尊勝院あり

知恩教院 應仁記にみえたり 太谷寺と號す弘地むかし正久寺常在光院白毫院太子堂及び釋親鸞聖人の墓ありあらはる 廢しあらはる佛境へ遷す

きさらぎとかんつても人のむれたる河原のなかに花茶のゆかしきはれ山　谷靏屋

かしこや京を見下す御忌詣　蕪村

御忌の鐘ひゞくや谷の氷まで　仝

御忌の加茂に淀も鞍馬も平等に　仝吏 嘯山

松の濤耳ふさぐべし御忌の鐘　其誠

附中に樹みたるや知恩院（知恩院に在りて）　蘭更

圓山 安養寺といふ吉水大織冠法院の故墟之慈鎮和尚棲なれ当山本尊百練抄にみえたり洛東の佳境なり坊舎六院山崖の建續く亭閣林泉玲瓏として又端寮といふ。多福庵也阿弥。長寿庵左阿弥。勝興庵正阿弥。花洛庵源阿弥。中左阿弥なる織田入道雲生寺道八の塔あり是阿弥。多藏庵長の舎す有楽の子なりむかし頼輝の茅廬遷庵の像あり信長の舎す有楽の子なりむかし頼輝の茅廬の像あり道八讃していふ

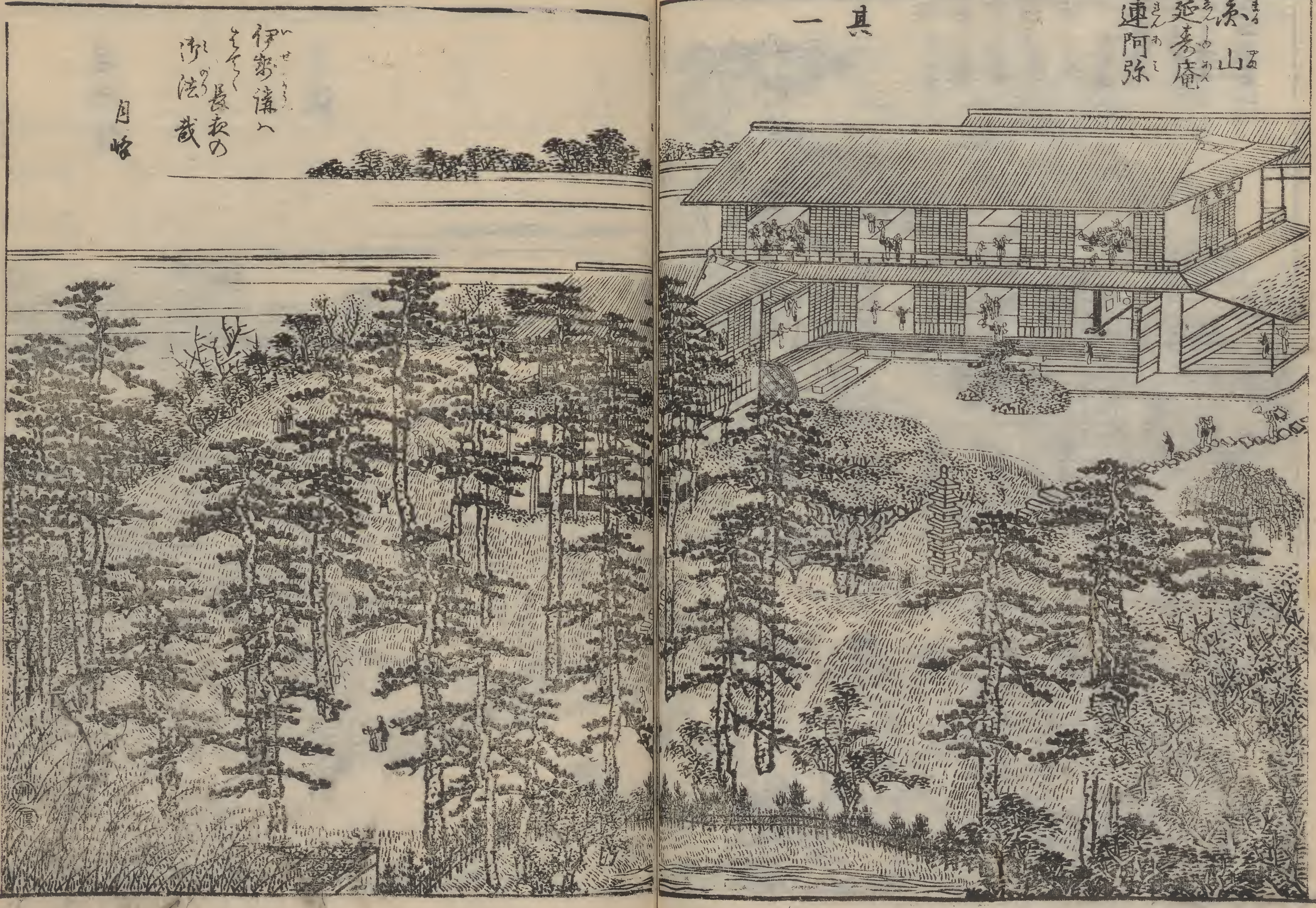
ふたくふれやつきぬかくちみなるしま横世のふ遊庵今に及ハ乃ろ錦とかわなかくも華麗うきみしにかほ古き浦ふしもやまし

庵も人モふ知古坊主ヲ芸人トラヘテ 成就歎ト世々孤可殘垂カト

多藏庵の庭道瀧阿弥の他多福庵の書院の画ハ許漢の筆又境地に古松の名あり（慶安元年日）

今朝出し日ハ加茂川帰路もまたつ山　羅人


圓山
多藏庵
也阿弥
初ハ眼阿弥とよぶ
㊀喜居亭
㊁四大塔
㊂宇賀廟
㊃春曙池
㊄七星橋
㊅彩霓橋
㊆浪影橋
㊇春眠亭
㊈天柱峯
㊉桃源窟


円山
延寿庵
連阿弥
其一
伊勢講へもそつて長夜の御法哉
月峰

将軍家　鷲山の上方にあり　穀斷卿記云　明應二年十一月五日以將軍塚蘇生勅ㇾ之

和漢雜詩曰　送人之日本　周一居士

洛水城東第五橋　秋風上國思迢迢
將軍塚靜家無難　富士峯深雪未消
鯨海浮杯朝對日　龍宮洗鉢夜聽潮
阿師到日若相想　莫惜音書萬里遙

上東門院塔　知恩院正堂の西にあり　藤原氏彰子一條院乃皇后
道長公の女也　扶桑畧記曰　萬保元年十月三日崩
しのふ大谷に葬る

家集云　皇太后宮せうのひとく大谷に送りまうしけるに　相模

あはれ君雲のよそにみも大谷の煙とならんかげをやはみんし

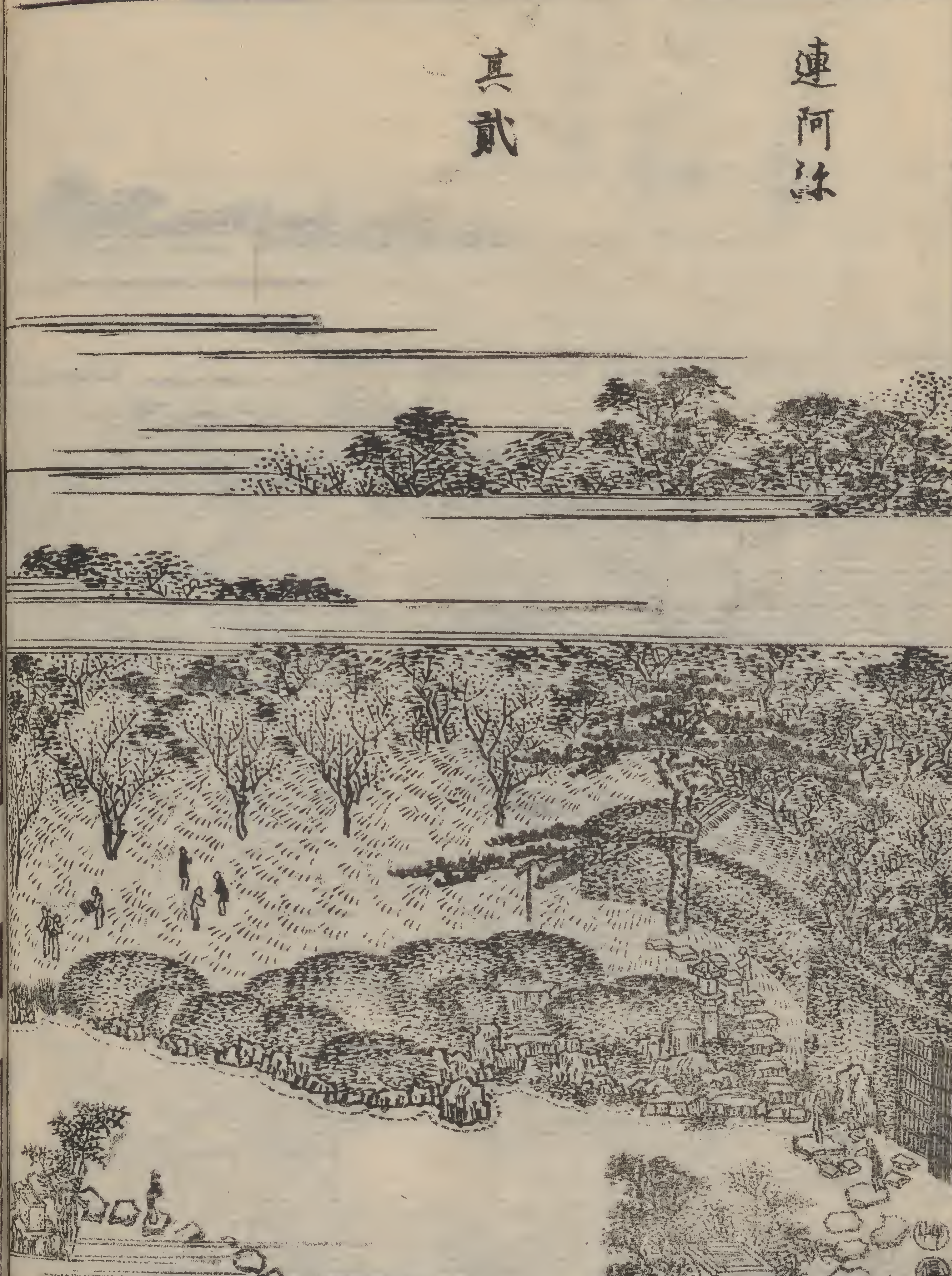
皇太后妍子塚　萬壽四年九月　祇園の東大谷に葬らしまる　榮花物語に見ゆ
藤原氏三條院の皇后　道長公の女なり。今これ世人
祇園女御の旧蹟と称し　児女子の塚に
誤し　榮花物語も可なるんや

長樂寺　祇園の東にあり　寛平年中建立　拾芥抄にみゆ　むかし諸名儒
多くきては遊宴しくは詩と賦を　無題詩に著次又大江嘉言
の和哥あり　後拾遺集に出る

本朝文粹

初冬於長樂寺同賦落葉山中路　高岳相如

夫長樂寺者形勝之其一也。山頭東嶮望
鷲峯於不退地之前野面西平顧鹿苑於



無漏界之右。干以俗機可斷。干以業塵可消。故吾黨占斗藪兮攀登。擎合掌兮禮拜而已矣。于時樹間葉落。山中路幽。晩霞影輕。漫埋出峡之猿叫。暁雨聲冷。暗洗在林之鹿鳴。度澗以繽紛。拂岩腹以蕭颯。至彼錦窠脆而辭蜀機。丹九碎而謝仙竈。樵蘇徃反。杖穿朱買臣之衣。隱逸優遊。履蹈葛稚仙之藥。遂使結烟之苔鬢。半變其青。噴雪之泉脉。漸久其白者也。既而世外地上。天中樹前。錫振九條寒嵐傳而響遠。鐘撞三下夜霜和而韻高。如予者藥生難秀。雖守槐林之株。花報猶芳。始到蓮官之砌。請任禪定將離愚癡。云爾

蓮華園院 双林寺の内にありいにしへは拾芥抄に云左大史尾張定鑑の造建なり僧房六區あり寺は永正十年の縁起文和年中の若勝あり又僧西行庵址あり頓阿草庵集にみゆる又平康頼入道の山荘の旧蹟あり平家談及び宝物集に記せり頓阿法師の墓あり覚玉集に出たり近年双林寺頓阿の古蹟蓮華園院と題し旧に遷しく額をかく名蹟しれ故にを上家のわすあり先年至徳年中圓阿上人名地の荒廢を悼く再興に及べり



端之寮
其弐

庭阿弥姫



東山席上題圓應樂画

山秀川廻抱帝州
欄前萬景在毫頭
冊青天下無雙手
佳麗東山第一樓

右
指吉端寮也
永田観鵞曽大書此五字扁于其樓
六如庵慈周




呂蛤


東山
多福菴
林泉
其一
春日同詠寄鶴祝書

多福庵

其貳

有登作

題芳水多福菴

門前芳水澹
巖崖流繞閑
庭苔自埋宜
矣菴題多福
宇烟霞雪月
四時佳

龍公美



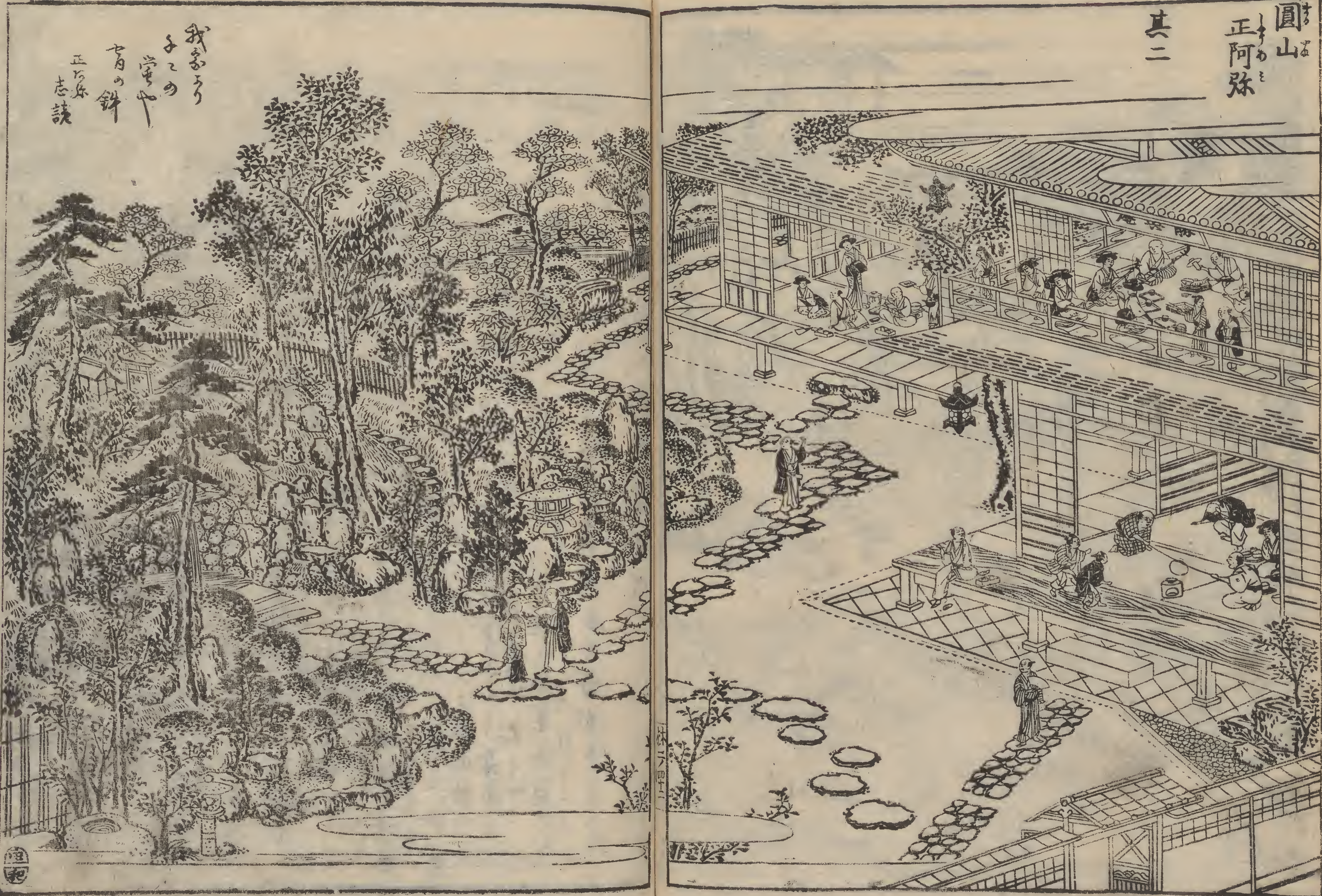


円山
長寿院
左阿弥
林泉ハ織田有楽の作りにて又有楽の古墳あり
青雲楼
梅のちれ
あくかゝ苔の
写さ夕り
定雅


圓山勝興庵正阿弥書會

圓山（まるやま）正阿弥（しやうあみ）

其二



祇園社感神院牛頭天王と號す天禄年中より感神院初て官く
天永二年官符を賜ひ愛宕郡八坂の郷観慶寺感神院と
を以て延暦寺の別院とする事ハ今昔物語に見えたり延久二年十二月
焼亡の事あり東山林葉略記に出たり承安二年六月 上皇神輿三基を
進む百練抄にあり正殿禮殿神樂所御厨所小祠四十餘薬師堂今ある
観慶寺と号す次元三大師堂多宝塔ハ近世烏有に罹る祠官の長を成
執行といひて一家あり建仁以後綸旨院宣國宣及び将家の書翰數多
十章を藏む僧房九區祠職二十餘家あり六月祇園會神輿
の旅所四條京極にあり當年修補に遷て今ハ烏丸五條坊門
大善院にあり今ハ太政所町として

○祇園神輿洗 傳紀事云五月晦日生子の男女祇園社に詣して各萩葉を
受て禍災を禳ふ是を茅抜と稱す衣に入て神輿三基ハ
太政所に出し祭式を勤む所謂本社の中央ハ素盞烏尊なれバ
太政所と號す次西ハ稲田姫なれバ少将井と號す東ハ竜王女なるを
今御旅と號す次太政所今佛光寺の神輿ハ殿に出し少将井ノ神輿
一基ハ祇園町地蔵堂のあたりへ神幸しまうけの小屋に遷しまゐらす
故に此名あり此日よりも産子の人々一樣の挑灯を竿頭に擧て伊達
俗に夜ハ賑しく本社へ参る是を御迎挑灯といふて又祇園鴨川の
女伶妓婦の當風流に装ひ優しく花の盛老の形となりて練る
繡を綵ひあるハ女も男の風俗に変じ男も女の粧ひをして身をやつし
雛子の如く社頭二軒茶屋敷の下
祇園町の群集ハ稲麻のごとく天地の間もなく又六月十八日も
遍く物出して晦日異なる事なし神徳の餘光を
平天下のゑそほし

美しの宮人雛妓装ひ　蘭島

髙臺寺の林泉ハ豊太閤御靈屋の下方丈の東にあり風光清雅にして洞庭
と縮の佳あり舊此地ハ雲居寺岩栖院金仙寺等の古跡なり當山乃嶺を
鷲峯といふ鷲尾中納言隆良卿の山莊の跡によりて號く慶長年中
豊太閤の夫人髙臺院湖月尼公の營給ひ則ち此に葬奉る石塔婆あり
又其側に天哉翁長嘯墓を建る御靈屋ハ寶形造りして内外莊嚴美
く長押の上に卅六歌仙を掲る和哥ハ八條智仁親王筆画ハ土佐光信なり
秀吉公影　政所尼公影　三江和尚像　木下二位法印像　常光院殿二位法印 浄英と号す
法印妻尼像 雲照院齢岳 永壽と号す　堀監物像 傑山道英居士　千子院度糸城門弟　されハ當山ハ
洛東の佳邑にして名區多し春ハ櫻花幽艶として匂ひ濃く
夏ハ座中の池に面に燕子花咲乱き又秋ハ萩の花錦を晒たる如く
霧深うしく起伏し鷲嶺の月皎々として鮮なるハ連嵩
小雲繽紛と風に随ふて起伏し東坡が白鳳に騎かと疑ひ
宋玉が幽蘭白雪の曲を作るの勝地也

秋過高臺寺見芳宜花　龍公美

高臺人靜梵王家　鳥雀群飛樹外霞
日暮放參鐘絕後　秋風摧紫鹿鳴花

九日環中禪師邀蕉中和尚及余遊高臺寺上方余有故不得倍從後讀其唱和詩有感因賦呈二師　六如菴

寛政己酉春罹災鞠爲荒場矣

佳賓佳節興佳哉　詩爲兼秋更帶哀
百六數歸巳嘆火　金銀寺化漢地灰
織亭避雨寒吹帽　菊水試茶香滿杯
正使空門心不着　堪看鹿跡上高臺

寛政己酉春高臺寺罹災鞠爲荒場矣環中禪師辛勤重構亡幾殆復舊觀功亦偉哉　六如菴

巨廈支頹幸有人　重榮花木挽囬春
唯除林表孤峰色　二百年來事々新

高臺寺の花さかりに

迷ひてそ並ふかおりしろき櫻かな　定雅





高臺寺方丈林泉

其一

高臺寺小方丈

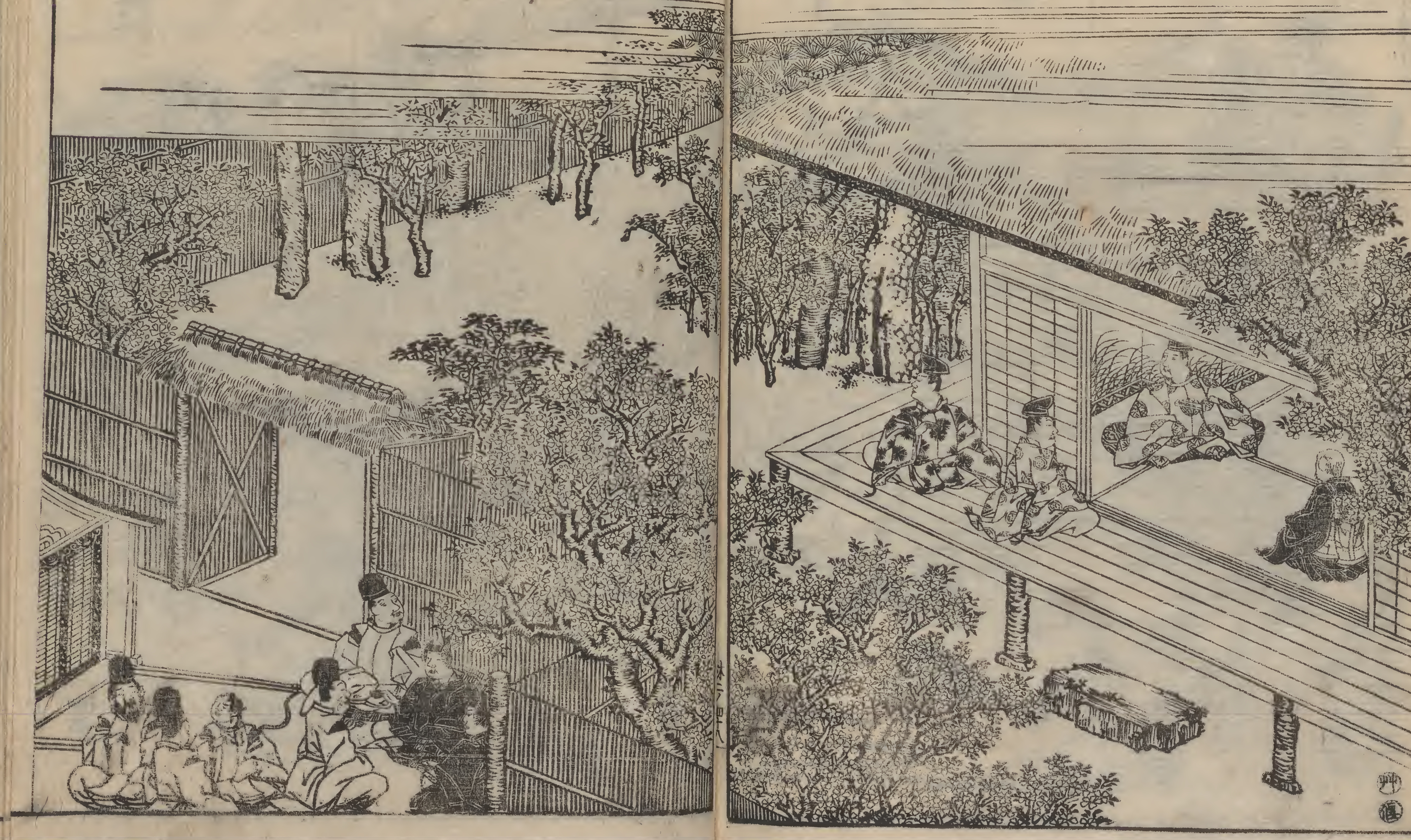


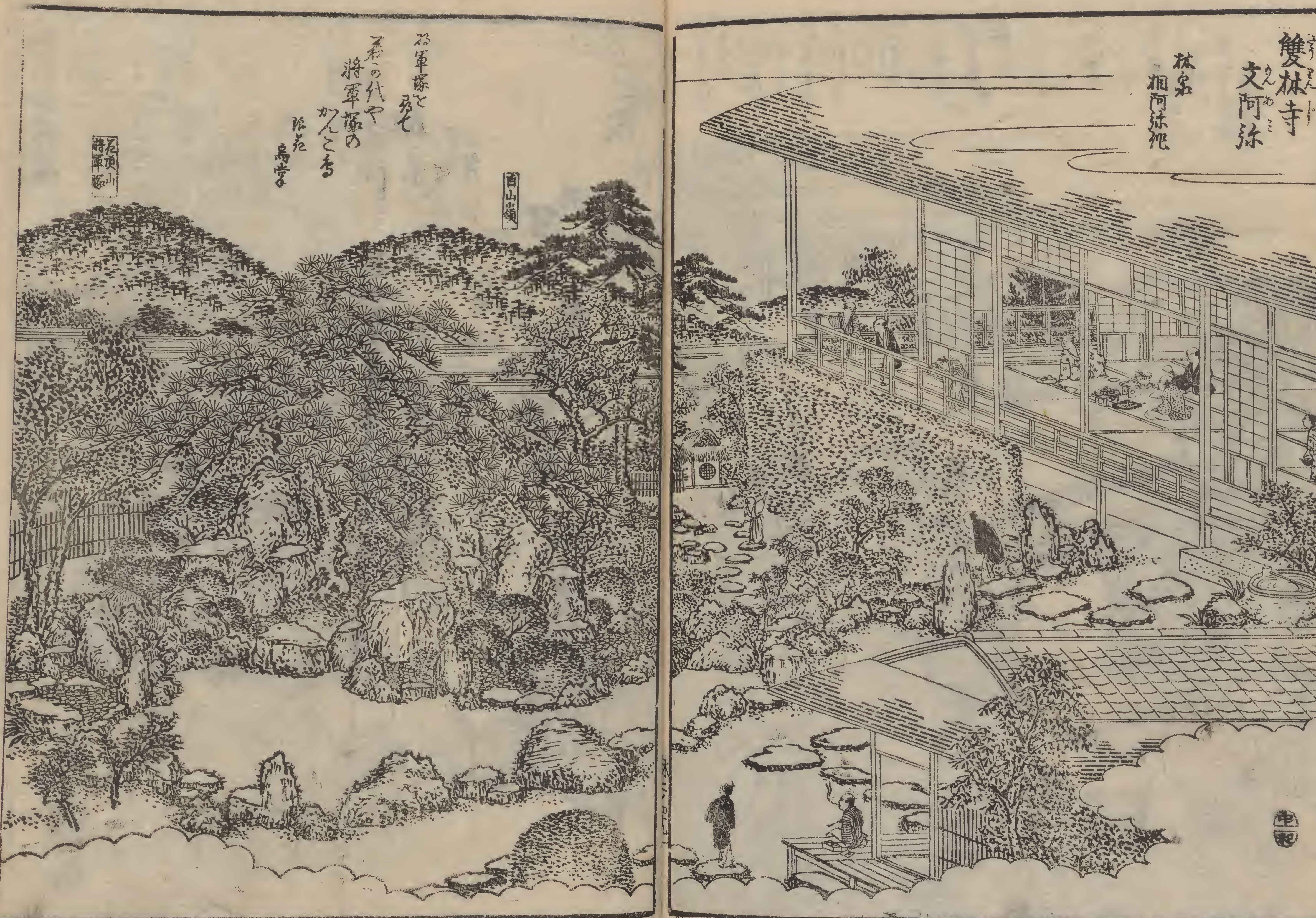
乙卯重九
環中上人邀登高臺寺山閣設宴
蕉中禪師
白雲西望久將沈綺席留連興轉深不擬登高能作賦鮮言山水有清音

同賦　環中禪師
登高非傚俗迎賞爲林泉欒閣幽松際憑欄飛鳥前暮寒千嶂碧雨氣萬家烟適莫歸期晩好教初月懸


雙林寺 長喜菴
宿棊華院主
月峰之住菴
簷前雨細山添緑
簾外花飛雪散香
况復主人談論妙
忘歸終日酔金觴
龍公美
梅の月
定雅
憩長喜庵
秋炯漠々
水冷々
物色清奇
溪上亭
試見天公
存画癖
猫成一幅
翠堆屛
三峯
荷田信郷

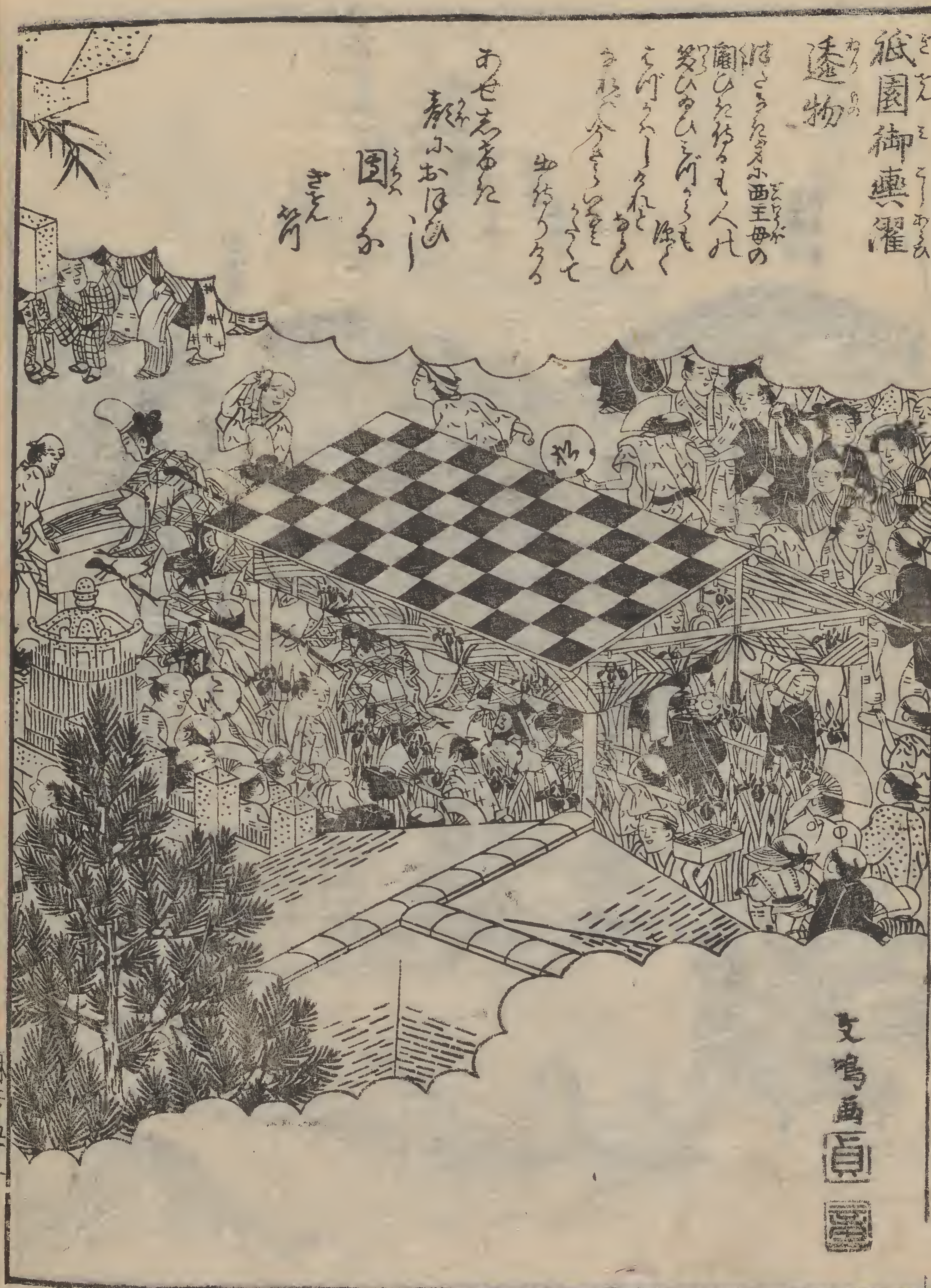
むかし
上人の
菴室園にハ
庭堂の花
櫻花多く
咲乱れて
雲客
群集あり
しか
今ハ双林寺に
形ばかりの
跡を
のこされ
しも
東海の
ごとび
桑田と
なりて
いまは
古をわ
しのぶ





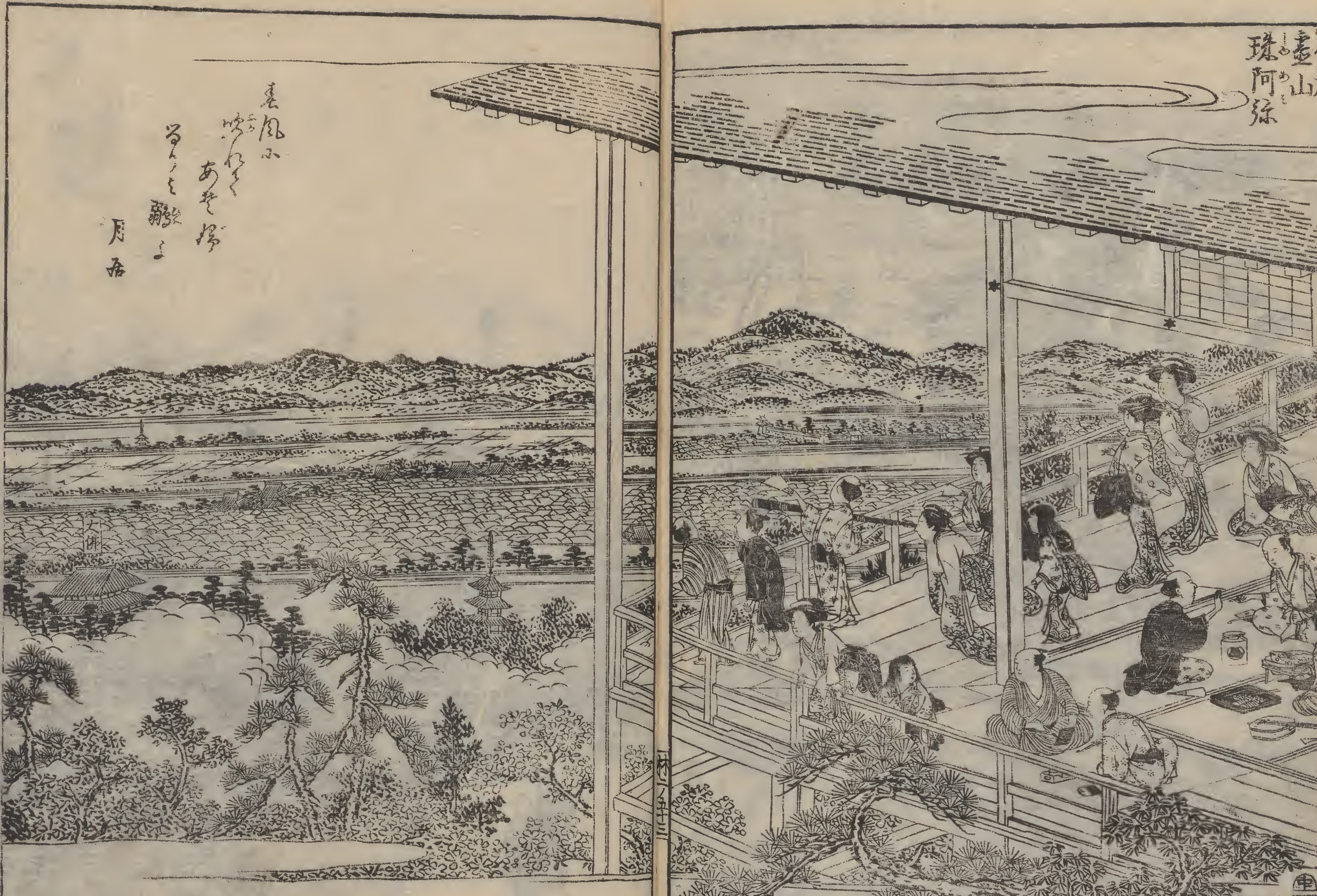
雙林寺
文阿弥
林泉 相阿弥作
将軍塚と題して
君が代や将軍塚のかんこ鳥
浪花 烏掌
花頂山 将軍塚
百山嶺


其一


祇園御輿濯
邌物
文鳴画


其二


霊山（りやうぜん）叔阿弥（しゆくあみ）
花の風かろくきてふけ酒の泡
嵐雪



臺山
珠阿弥
春風に
吹れて
あそ場
月居
大佛


霊山嚴阿弥
長嘯楼
祇園清水
呂鈴
鷲峯
音羽山
長嘯子墓
清水の塔
豊國山
山崎
文阿弥

下河原宴席

女伶會

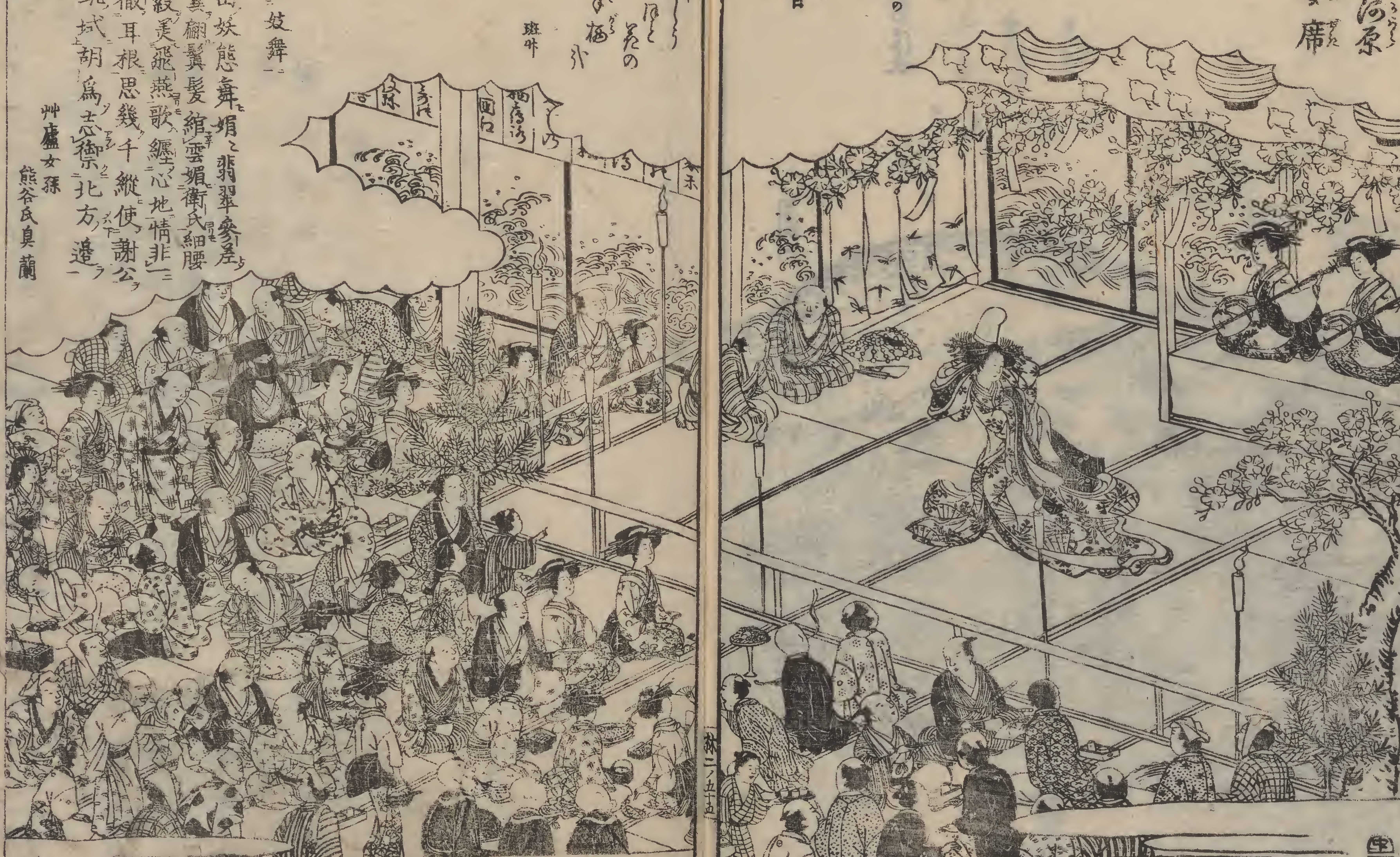
美しう咲ほこる花の紅梅か

斑竹

題妓舞

東山妖態舞娟と翡翠參差
振羽翼翩翾髮綰雲娟衛氏細腰
带縠美飛燕歌纏心地情非一
調徹耳根思幾千縱使謝公
追兆式胡爲忘禦北方邊

艸廬女孫
熊谷氏貞蘭



霊山 山頂に寺あり正法寺といふ山槐記云治承二年十一月佛寺七十四箇所の其一とす藤明衡霊山に遊ぶの詩無題詩に見へたり和漢拾遺集及び新續古今集に見ゆる
山中に長嘯子の宅址あり

東山冬景　三峯　荷田信郷

樓々閣々雪如塵一操瑤光望裡新
不是東山謝家妓婆娑縞袂素諸人

東山　梅華仙

東山三月競繁華紅錦青羅人似花
終日春風吹不落芬芳腦殺幾千家

京中ゟ吹上りたる若葉の那　洛東　文雲

上人の木履紙からん夕しぐれ　竹苑

盃九志もし志阿弥や夕がすみ　轍士

都林泉名勝圖會巻之貳　終